

このように、山陰街道では、街道町において行われる祭礼などが寺社などの歴史的な建造物や宿場の町並みと一体となって、趣きのある風情を形成し、今もなお、多くの旅人や商人が通ったであろう、街道筋の活気を感じさせている。

とりいもと
愛宕街道は清涼寺の門前から西へ鳥居本を經て清滝・愛宕山へ通じる道であり、愛宕山山頂付近に鎮座する愛宕神社への参詣路である。江戸時代の書物には、京都から御室・清涼寺・清滝の順路で愛宕への道が描かれており、愛宕山への参詣道として、古くから多くの人々に利用されてきたことが分かる。

西山の中核となる愛宕山は、火伏せの神を祭る神山として畏敬され、この地を代表する山として古くから月まいりの場所として人々に親しまれてきた。

京都の市中には各所に愛宕燈籠があつて、遙か
西北の愛宕山権現を崇拝するとともに、家々の台

ことに7月31日夜から8月1日午前明け方にかけて行われる通夜祭には、参詣者が多く、一の鳥居のある嵯峨の鳥居本から、山頂まで、人の列が続く。この日のお参りは千日詣と呼ばれ、延宝4年(1676)に成立した「日次紀事」の中ひなみきじでも記されている。一日で千日の参詣に匹敵すると言われており、参詣者は火災除けの護符としきみ櫛の枝をうけ、これを家に持ち帰って神棚やおくどさんくどさんに祀る。

愛宕街道沿いに位置する嵯峨鳥居本は、室町末期頃、農林業や漁業を主体とした集落として開かれた。その後、江戸時代中期になると、愛宕詣の門前町としての性格も加わり、江戸時代末期から明治・大正にかけて、愛宕街道沿いには、農家、町家のほかに茶店なども建ち並ぶようになった。

この地区では、毎年8月に町内の地藏盆と化野念仏寺の千灯供養が行われる。この千灯供養は、



2-85